

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想
 - 2-1：近代の知的状況における宗教思想
 - 2-2：批判哲学から批判的实在論へ
 - 2-3：シュライアマハーの宗教哲学
 - 2-4：ティリッヒの宗教哲学
 - 1：ティリッヒの宗教哲学構想と意味世界
 - 2：ティリッヒの象徴論 6/17
 - 3：ティリッヒの神話論——シェリング、カッシーラー、ブルトマン 6/24
 - 2-5：波多野精一の宗教哲学
 - 1：波多野宗教哲学と实在論 7/1
 - 2：波多野宗教哲学の方法論、そして象徴論 7/8
 - 2-6：ヒックと批判的实在論 7/15
 - 2-7：言語から宗教的实在へ
 - 1：リクールと解釈学的プロセス 7/22
 - 2：イエスの譬えの読解プロセス 7/29
 - 2-8：言語論と宗教哲学 10/7
 - 2-9：次元論と宗教哲学 10/14

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

<前回>シュライアマハー：宗教哲学の基本問題と言語論の射程

(A) シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

5. 宗教哲学とはいかなる学問か
 - ・波多野：「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である。」
 - ・批判的实在論：宗教も科学もそれがコミットする存在の实在性を前提にする。そして、宗教と科学という人間の活動は实在する。この实在する宗教と科学とが存立するための条件を解明することが、宗教哲学と科学哲学の課題となる。
「宗教が可能であるためには、その主体である人間はどのようなでなければならないか。」（←ロイ・バスカー「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようなでなければならないか。」）
6. 宗教哲学の基本問題（宗教研究基礎論、宗教研究の哲学）→具体的な多様な宗教研究
（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年、13-18頁）
 - (1)宗教とは何か。（宗教の概念規定：哲学的人間学・現象学的類型論）
 - (2)宗教はいかなる積極的な存在意味を持つのか。（宗教批判の批判的検討）
 - (3)なぜ、多様な宗教が存在するのか。（宗教的多元性）

↓

この基本問題との関わりで、シュライアマハー、波多野精一、ティリッヒ、ヒックを検討する。

- ・シュライアマハーのいわゆる「**個体主義(Individualismus)**」の再解釈の必要性。

↓

この後に（1980年代以降）、シュライアマハー研究は新しい段階に入る。言語論を中心にシュライアマハーの思想世界の解明は、重要な研究課題となっている。

人間の共同性と言語性。

「対話の理論——人間学、弁証法、解釈学の相互連関」（ヴォルフガング・H・プレーガー『シュライアマハーの哲学』玉川大学出版部、1998年、原書1988年、135-181頁。）

(B) 人間性と言語——『モノローゲン（独白）』1800年

- ・認識と行為の根源へ。直観と感情。＝宗教批判への弁証・宗教概念（本質論）
- ・人間の共同性・言語性と宗教。→ 宗教の実定性と複数性

↓

思索の体系化と実践

1. 哲学体系論＝弁証論(Dialektik)

- ・人間性（個・自由、共同性） → 哲学的思惟・知の構造
言語と対話を哲学的体系に位置づける。

Dialektik ist Darlegung der Grundsätze für die kunstmäßige Gesprächführung im Gebiet des reinen Denkens. (1833. S.117)

2. 解釈学(Hermeneutik)、テキスト解釈を哲学する。

3. 説教：説教者シュライアマハー、Barth(1923/24、13-243)

↓

<研究の可能性>

- ・説教の現象学・構造分析 → 研究対象としての「説教集」
- ・読解の現象学・構造分析 cf. 実践神学
加藤常昭『文学としての説教』日本キリスト教団出版局。
並木浩一『聖書の想像力と説教』キリスト新聞社。

2-4：ティリッヒの宗教哲学

1：ティリッヒの宗教哲学構想と意味世界

<宗教哲学構想>

宗教の可能根拠を人間存在から論じる。

- A. 宗教の概念規定
- B. 宗教批判
- C. 宗教的多元性

(1) ティリッヒと宗教哲学

1. 二つの宗教哲学構想→AとBを中心に、Cは潜在的、問題を残す。

2. 意味の形而上学

1919 年「文化の神学の理念について」

1923 年『学の体系』、1925 年『宗教哲学』『教義学講義（マールブルク講義）』

3. 諸学 → 哲学的人間学 → 宗教哲学

歴史学、人類学、社会学、心理学

文学、宗教学、神学

4. 意味意識の分析（意味の現象学）・「形式と内実」（Form / Gehalt）

「文化は宗教の形式であり、宗教は文化の内実である。」

意味連関（部分と全体）と意味根拠（根底と深淵、Grund / Abgrund）

意味連関の歴史性

5. 基礎的存在論と相関の方法

基礎的人間学・「問いと答え」（Question / Answer）

意味を問う存在者、自己の意味（人間とは、自分の存在が問いである存在者である）

問いの表現としての文化

6. ティリッヒ（Paul Tillich, 1886-1965）『組織神学』第一巻（新教出版社）の序論。

Systematic Theology. Vol.1, 2, 3 (1951, 1957, 1963), The University of Chicago Press.

	Question	Answer
Vol.1 Introduction		
Part I	Reason	Revelation
Part II	Being	God
Vol.2 Part III	Existence	Christ
Vol.3 Part IV	Life	Spirit
Part V	History	Kingdom of God

• Being / Existence / Life • History

• God / Christ / Spirit : Trinity

Creation / History / Eschaton • Eternity : History of Salvation

7. 「相関の方法」（Method of Correlation）。

体系の横軸（横構造）と三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸（縦構造）。

8. 神学に限らず、そもそも学・科学とは、問題解決の試み（探究過程）と捉えられる。

学はそれ固有の問いを立て、固有の方法によってその解決を試みる。

↓

学としての神学の営みは、いかなる問い（問いの定式化）を、いかなる方法で探究しようとするのか？ その問いに対して、いかなる解決を与えるのか？ という観点から、つまり、「問いと答え」に規定された構造において論じることができる。

9. 「個と共同体」の循環

学の営みにおいて「問いと答え」の構造が現れるのは、何よりも、科学者共同体内部における、問答・討論・対話といった形態においてである。これは、学が共同の営みであるということにほかならない。したがって、神学の営みに関しても、その背後にある共同体（伝統）の存在を無視することはできない。

10. 「問いと答え」の定式化における哲学（あるいは哲学的要素）の役割

ティリッヒは、『組織神学』における神学が答えることを求められる「問い」について、それが時代状況において変化することを確認した上で、状況において提出される問いを問いとして定式化する役割を果たすのが哲学であると述べる。

したがって、ティリッヒにおいて、「問いと答え」相関は「哲学と神学」相関として具体化されることになる。（しかし、より詳細に検討すると、ティリッヒの相関の方法における、神学と哲学の関係は、ティリッヒが説明する以上はかなり複雑であることがわかる。なぜなら、ティリッヒの相関の方法において、神学も哲学も実は両義的（さらには多義的）だからである。すなわち、一方に、「問いと答えの相関」としての神学（『組織神学』全体）と答えとしての神学（『組織神学』の各部の後半）という神学の両義性が、また他方に、問いの定式化としての哲学と相関構築を可能にする思惟の哲学的要素としての哲学（合理的思惟の担い手としての哲学）の両義性が存在している。）

11. 「すべての神学的労作の一つの極である『状況』とは、個人や集団がその中において生きるところの経験的な心理学的社会的状況を意味しない。その状況とは、彼らが彼らの実存の自己理解をその中で表現するところの科学的、芸術的、経済的、政治的、倫理的諸形態の総体を意味する」、「神学が考えなければならない『状況』とはそれぞれの時代にさまざまな心理学的社会的諸条件下においてなされる創造的な実存の自己理解である。」
(4)

12. 「状況」とは、相関の方法における「問い」の極を定式化するための資料・源泉（実存の自己理解の表現の総体）において問われるものであり、しかもそれが科学的から倫理的までの文化の諸領域全体に及ぶということからわかるように、「神学は、それらの諸要素が理論的また実践的に見出した文化的表現全体」（ibid.）を取り扱わざるを得ないことになる。つまり、「組織神学の資料を一瞥すると、それがほとんど無制限に豊富であることがわかる。すなわちそれは聖書、教会史、宗教史及び文化史である」（50）。

13. 相関の方法＝諸科学が提供する文化諸領域における資料から哲学的解釈によって「問い」を定式化し、それに対してメッセージを「答え」として相関させる（答えとしての神学）、この一連のプロセス。相関の方法において、諸科学、哲学、そして神学の三者が関連づけられる。

14. 二つの宗教哲学構想と意味論

意味世界：個と共同体

意味概念：主観性・客観性・相互主観性

実存性

(2) 意味世界と宗教の概念規定→A

1. 宗教の概念規定の意義：還元主義→全体論、実体的概念→機能的概念

2. 古典的議論→「宗教とは何でないのか?」、「単なる・・・ではない」

(1) 「宗教（信仰）とは、蓋然的な知識・認識の問題である」、「真の宗教は合理的な神概念を前提にすべきである」 → 宗教は認識である。

(2) 「宗教は倫理的実践の問題である」、「信仰は意志の決断の事柄である」
→ 宗教は決断である。

S. Ashina

(3) 「宗教は感情あるいは情動の問題である」、「信仰は絶対的依存感情である」、「信仰は主観的な気分の問題である」 → 宗教は感情である。

↓

人間の全体性の問い（全体論）

3. 人間の生物学的条件から。「人間はもっとも不完全な動物である」。
20 世紀の哲学的人間学（シェーラー『宇宙における人間の位置』、ゲーレン『人間—その本性および世界における位置』）などにおいて、詳細に展開された議論である。
 - ・不完全さ＝誕生時の環境適応力の欠如
＝自由（活動によって自己と世界を構築できる）→「自由とは何か」
 - ・「人間は考える葦である」（パスカル）、「自己—世界」構造の可塑性
- ↓
- 「人間は意味に固執する存在である」、意味世界を離れては、人間は人間らしく生きることができない。
4. パネンベルク：神学的人間学
 - ・人間の世界開放性と神の像
身体性と世界
 - ・哲学的人間学の思想史的遡及：啓蒙主義（ヘルダー）から教父へ
5. 「象徴を操る動物としての人間」（カッシーラー）→意味世界の構築
象徴を操る能力によって構築された世界（自らの存在意味が確認できる世界、自分らしさが確保できる世界）を「意味世界」と定義する。
6. では、意味世界はどのような仕方で構築されるのか。
知識社会学（バーガー+ルックマン）：個人と社会の弁証法
homo fingens :
「外在化（表現）／客体化（疎外）・制度化／内在化（社会化）」から構成される循環構造における人間的現実・意味世界の生成。
7. こうして構築されたわたしたち人間の意味世界は次のような特性を持つ。
 - ・意味世界は相対的である、歴史的あるいは偶然的である → 恣意性
 - ・意味世界は意味世界内部では根拠付け得ない。ゲーデルの不完全性定理。
- ↓
- 世界の無根拠さ
8. 意味に固執する動物としての人間と無意味性の脅威
→ 人間は意味世界を安定化させるものを求める。
9. A：無根拠な意味世界を安定化させる装置として社会的心理的に生み出されたのが、「意味世界の根拠付けとしての宗教」（なぜに答える、生に意味を与える宗教の機能）である。
根拠付け→正当化と転換の二重性（イデオロギーとユートピア）
意味世界と意味根拠
実在と言語
10. 以上の結論：「人間は本質的に宗教的である」
「自分自身についての問いと神への問いの共属性」（パネンベルク）

これは、宗教改革者（ルターそしてカルヴァン）に遡る。

↓

哲学的人間学という問題設定の意義

11. 宗教の概念規定（仮説構築）の基本方針＝「広すぎず・狭すぎず」

宗教の普遍性と現実の限定性

12. ティリッヒによる宗教の概念規定（A）

広義の宗教概念（意味根拠としての宗教・意味世界の正当化としての宗教）と狭義の宗教概念（制度化された既成宗教・常識的な意味での宗教）との区別。

13. ルター「大教理問答書」（『信条集 前篇』新教出版社、91頁）

「金と財産をもっている時に、自分では神とあらゆるものを豊富にもっていると考え、これに信頼して、高慢にも人に対して何とも思わない者が多くある。見よ、このような人はまた、マンモンという名の一つの神、すなわち、金と財産をもっており、彼はそれに自分の全心をおいている。そして、かかるものは地上でもっとも一般的な偶像である。……同様にまた、すぐれた技術・才能・寵愛・友情・名誉、をもっていることに信頼してそれを誇る者も、一つの神をもっているが、それは唯一のまことの神ではない。」

以上の引用においては、「神」が二つの意味で、広義と狭義の両方の意味で使用されていることに注目。

14. カルヴァン『キリスト教綱要 改訳版』第1篇・第2篇（渡辺信夫訳、新教出版社）

「第1章 神認識と自己認識とは結び合った事柄である、それらはどのように相互に関連しているか。」

「我々の知恵で、とにかく真理に適い、また堅実な知識と見做さるべきものの殆ど全ては、二つの部分から成り立つ。すなわち、神を認識することと、我々自身を認識することとである。ところが、この二者は多くの絆によって結び合っているため、どちらが他方に先立つか、どちらが他方を生み出すかを識別するのは容易でない。」（38）

<参考文献>

1. 芦名定道 『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』（小原克博氏との共著）世界思想社。
『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
2. バーガー＝ルックマン 『日常世界の構成』新曜社。
3. バーガー 『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社。
4. ルックマン 『見ない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社。
5. カッシーラー 『人間——この象徴を操るもの』岩波書店。
6. 盛山和夫『社会学とは何か 意味世界への探究』ミネルヴァ書房。
7. パネンベルク『人間学——神学的考察』教文館。
8. 金子晴勇『マックス・シェーラーの人間学』創文社。